

第2節 前身機関(徳島支場・四国支場)の発足

1.徳島支場・四国支場の沿革

明治政府は西洋から輸入した穀類,蔬菜,果実等を栽培し外国農具の試用を開始したのが明治4年(1871)である。その後,勸農試験場や重要穀菜試験地 を設置し,内外穀菜種苗の収穫と試栽範示・種苗の交換・農具の試作・肥料試験などを行い,平易でかつ直接農家の模範となる事項を明らかにし,巡回講話の題 材に供した。

明治19年農務局仮試験場農事部が設置され,農業技術に関する各種試験が組織的に行われ始めた。そうして,明治26年(1893)に農務局仮試験場は農事試験場本場となり,新しく6支場が各地に設置され,ここに国営の農事試験研究機関が発足したのである。

当時の農事試験場の考え方は,老農の実験と学者の研究をもって農法改進の途を講ずることとし,農事試験を3つの段階に区分する考え方をもっていた。すなわち,(1)研究的段階,(2)応用的段階,(3)模範的段階である。

しかし,農事試験場の設置当初は,応用的および模範的試験に重きをおき,研究的試験は,付随的に行うことにし,成績の良好なるものはいち早く普及するのが至当であると考えたからである。

支場の設置については,明治25年第4議会に提出した試験場予算案および説明につぎのように述べている。「東京西ヶ原1ヶ所の試験場の試験成績を以て土 地気候の異なる全国各地方の農業におよぼすことは不可能である」という理由で予算案が通過し,大阪・宮城・石川・広島・徳島・熊本の6支場の設置を見るに 至った。

発足当時の徳島支場(徳島県名東郡加茂名村)における職員は,場長・青山元,技師・町田咲吉,技師・吉川祐輝の3名であり区域は徳島県,香川県,愛媛県,高知県と定められた。

明治29年6月に農商務省告示第12号によって,支場のすべてが改称され,大阪支場は畿内支場に,広島支場は山陽支場,徳島支場は四国支場に,石川支場 は北陸支場に,宮城支場は東奥支場,熊本支場は九州支場となり,さらに東海,陸羽,山陰の3支場が増設され,全国に計9支場が設置された。



徳島支場・四国支場の歴代場長とその任期はつぎのとおりである。	
青山 元	明治26年6月7日～28年9月27日
伊地知徳之助	明治28年9月30日～30年11月26日
山中 寿弥	明治30年11月26日～34年5月21日
今関 常次郎	明治34年5月25日～36年4月1日

明治36年,官制改革のため整理によって支場の廃止が打ち出され,山陰,山陽,四国,東海,北陸東奥の6支場 を廃止し,農事試験場は本場と畿内,九州,陸羽の3支場となった。廃場は府県農事試験場の整備にあて,応用的および模範的試験を分担することとなり,かくして徳島県に設置された農商務省農事試験場四国支場は,設立後10年を経過した明治36年3月31日で廃止されることとなった。

2.徳島支場・四国支場の業績

設立当初は,もっぱら実際栽培の改善を目的とした応用試験や模範試作が行われ,直接農家に農事改良の資料を提供した。水稻では在来品種の収集と特性調査 が始められ,栽培法では選種,採種法,播種期,播種量,移植期,移植密度,栽植などの試験が行われている。以下陸稲,蓼藍,アワ,大豆,裸麦,小麦,大 麦,ナタネ,ゲンゲ,果樹類などについての品種,栽培法,作況考照,肥料試験などを行っている。これらの成果は第一報とし農事試験成績(明治27年12月)にあるが本書の緒言にいわく「明治26年4月勅令ヲ以テ農事試験場官制ヲ定メ次テ其支場ヲ全国6力所ニ置カル當場ハ即チ其一ニシテ位置ヲ徳島県名東郡 加茂名村大字東名東ニ占メ管轄区域ヲ四國一圓トナス,用ユル所ノ圃場元ト多数耕作者ニ属セシヲ以テ作物及施肥亦自ラ異リ従テ地力ニ甚タシキ差異アリシカ故 ニ當初ハ凡テ肥料ヲ施サスシテ田ニハ稲ヲ,畑ニハ大豆ヲ栽ヘ以テ地力ノ均一ヲ図レリ,11月始メテ試験ニ着手シ主ヲ四國ニ於テ重要ナル冬作物即チ麦類及油 菜ニ就テ試験ヲ行ヒ12月ヨリ傍ラ藍作/試験ニ着手セリ-後略」

以下年度ごとの試験成績が報告され,明治34年度から農事試験場報告と改称され,課題別に成果が記されている。四国支場に関係あると思われる成果は,直 井市輔(1901):藍苗の成長期ト所含藍青定量ノ関係,伊東一二(1902):蓼藍種子採種ノ収量及品質ニ及ポス影響,今関常次郎(1904):すくも 製造に関する研究,今関常次郎(1905):蓼藍肥料試験,などがある。また,農事試験場特別報告第2号に吉川祐輝(1898):阿波国藍作法,同3号に は町田咲吉(1898):蓼藍及其製品ニ関スル研究成績,同14号小幡健吉(1901):徳島県下ニ発生セル三化螟虫駆除予防ニ関スル報告,がある。また,農事試験場要報第2号(1899)には,藍作ニ於ケル大豆粕肥料の効益が報告されている。

これらの成果は着実に実をむすび始め,特に水稻関係では種初めの塩水選,短冊苗代,正条植などの簡易で有効な技術が盛んに奨励され,技術改善に大きく貢献 した。これらの試験で得られた成果は徳島県農事試験場に引継がれ「農家必携・試験成績便覧」(明治37年10月)および農事試験成績報告第壹号(明治39年3月)に集大成され広く県内に配布されて農業技術の改善に大きな役割を果たした。

なかでも古くからの蓼藍の実情を調査した「阿波国藍作法」と「蓼藍及其製品ニ関スル研究成績」は,一般栽培者の参考になるとともに,その後の研究にとって有益な資料となった。

附:四国支場の再建

戦後間もない昭和21年1月,香川県琴平町で農林省主催の技術浸透方策実施協議会が開かれた際,時の香川県知事,田中省吾氏により善通寺の旧師団跡に農事試験場支場設立の要望がなされた。

農林省は同年9月開場式を行い試験圃場として旧練兵場跡に5haの耕地を求め,また,大麻山に研修農場をもつことになり,ここに43年余ぶりに農林省農 事試験場四国支場が再び誕生した。その後昭和25年4月には,中国四国農業試験場と改称なり,更に昭和27年8月には四国農業試験場として独立し,現在に 至っている。現在の組織は1室4部18研究室をもつ四国地域の農業研究のセンターとしてその機能を果している。